

複合施設の施設概要

1. 施設の考え方

(1) 基本的な考え方

施設全体にわたる基本的な考え方として、以下の点を重視します。

① 全ての人ができるユニバーサルな施設

- 0歳から高齢者まで、障害の有無、国籍、社会的背景等に関わらず、誰もが安心して来館し、利用できる施設とします。
- 鑑賞者・参加者・見学者としてだけでなく、事業の主催者や公演の出演者として施設を使う場面も含め、全ての人ができるユニバーサルなデザインとします。

② いつ来ても居場所があり、文化芸術や災害文化との出会いのある施設

- 交流ロビーゾーン（エントランス）や屋外広場は、誰もがいつでも気軽に訪れることができ、多様な催しが展開され、文化芸術や災害文化との出会いが起こる場となるような空間づくりを行います。
- ワークショップスペースやリハーサル室、練習室、ラボなどについても、中で行われている活動が室内で完結せず、外へと染み出していくような造りとします。
- 小さな子どもがいる方が親子で来館したいと思えるような施設づくりを行います。さらに、日中は高齢者、夕方は生徒・学生、夜は勤労者など、一日を通して多様な人が訪れる施設としていくことを目指します。
- 青葉山エリア内の他施設を来訪目的とする人も、気軽に立ち寄りや通り抜けができるような、開かれた施設づくりを行います。

③ 施設全体を使って総合的な活動を展開できることが特徴となる施設

- 仙台国際音楽コンクールや文化芸術関係の大会、他施設とも連動して展開するフェスティバル的な事業、国際センターだけでは会場が不足するような大規模学会といった、施設全体の様々な諸室をフルに活用する事業にも対応できるようにし、そのことが施設の特徴の1つとなることを目指します。
- 大規模な催事などの場合には、リハーサル室や練習室、ワークショップゾーンの諸室を楽屋、控室、会議室等として利用することなどを想定し、セキュリティやリスクマネジメントにも十分に配慮しながら、諸室の仕様や適切な来館者動線（いわゆる表動線）、関係者動線・搬出入動線（いわゆる裏動線）を検討します。
- 複数の諸室が同時に使われても音の漏れ、音や振動の干渉が起きないような構造的、設備的対応を行います。

④ 市民もプロも「みんな」で育む施設

- プロの公演を鑑賞するだけでなく市民も舞台上に上がったり、来館して展示を見学す

るだけではなく研究者や企業とともに新たな創造を行ったりするなど、市民が多様な主体と協働し、様々な活動や提案を行う「みんな」で育む施設を志向します。

- そのため、ホールエリア等の舞台機構や設備を、高度な専門技術がなくても取り扱えるようにすること、研究者や事業者、市民がともに活動できる設備やスペースを設けることなどに配慮します。

⑤先端技術に対応できる施設

- 技術の進歩に伴い、展示や舞台上の演出など各種表現に様々な映像・通信技術が用いられるようになっていくとともに、チケットの電子化、制作・練習におけるオンライン活用などが今後一層普及することも予想されます。また、被災各地を繋ぐハブ機能を備えることも視野に、施設内全てのエリアで映像・通信技術を適切に活用できるよう、基盤的な環境整備を行います。

(2)施設構成の考え方

複合施設全体の取組みとして、様々な連携事業の実施を想定しています。

また、音楽ホール、中心部震災メモリアル拠点それぞれが行う事業にも、「市民主体の取組みを重視し、活動支援、人材育成、交流促進を行う」「仙台のこれまでの蓄積に目を向け、未来へと継承する」といった共通項があります。

こうしたことを踏まえ、音楽ホール、中心部震災メモリアル拠点が完全に区画され隔てられた施設としてあるのではなく、両者の空間が連続性をもってつながり、共用や相互利用がなされ、様々な人的交流が生まれるような施設構成とすることを目指します。

《必要なエリア》

エリア	主な施設
①ホールエリア	大ホール、小ホール
②文化芸術創造支援・活用エリア	音楽リハーサル室、舞台芸術リハーサル室、練習室群(複数の中・小練習室等)、製作工房等(小道具・美術等製作場、収録室等)、ワークショップゾーン
③災害文化創造支援・発信エリア	展示スペース(常設展示、企画展示、展示開発室)、交流連携スペース(アーカイブ活用スペース、相談カウンター、ラボ、ワークショップスペース)、インフォメーションスペース
④広場エリア	交流ロビーゾーン(交流イベントロビー、情報コーナー、展示スポット、カフェ・レストラン等)、クワイエットスペース、屋外広場
⑤運営・協働エリア	施設の管理運営・事業実施に必要な諸室、事業を協働して推進していく団体の諸室等
その他	廊下、階段、エレベーター、エスカレーター、ダクトスペースなどの機能施設以外の共通動線等および設備・機械室等

(3)施設の共用・相互利用等について

①交流ロビーゾーンについて

音楽ホール、中心部震災メモリアル拠点いずれの検討においても、イベント開催や情報発信が可能な、交流促進に資するエントランス空間の必要性が認められます。こうした空間を含む「交流ロビーゾーン」については、両施設の共用部分として一体化します。

②諸室の多用途利用について

本施設は、施設全体を使って総合的な活動を展開できるよう、リハーサル室や練習室、ワークショップゾーンの諸室を楽屋、控室、会議室等といった多用途で利用することを想定します。

中心部震災メモリアル拠点において必要となる、「多目的カンファレンスホール」や「ミーティングルーム」といった機能については、そのための独立した諸室は整備せず、複合施設内の他の諸室の活用で対応することとします。

③人材育成、活動支援、施設運営等のための諸室について

音楽ホールの「ワークショップゾーン」や中心部メモリアル拠点の「交流連携スペース」等は、人材育成や普及啓発のための事業を行ったり、市民の活動を支援したりするための諸室として共通項があります。両施設におけるこうした活動が相互に可視化され、新しい出会いや交流が起こるよう、空間配置や動線上の工夫がなされていることが望ましいと考えます。

また、両施設の事務室などを含む「運営・協働エリア」についても、同様に空間配置や動線上の工夫がなされていることが望ましいです。

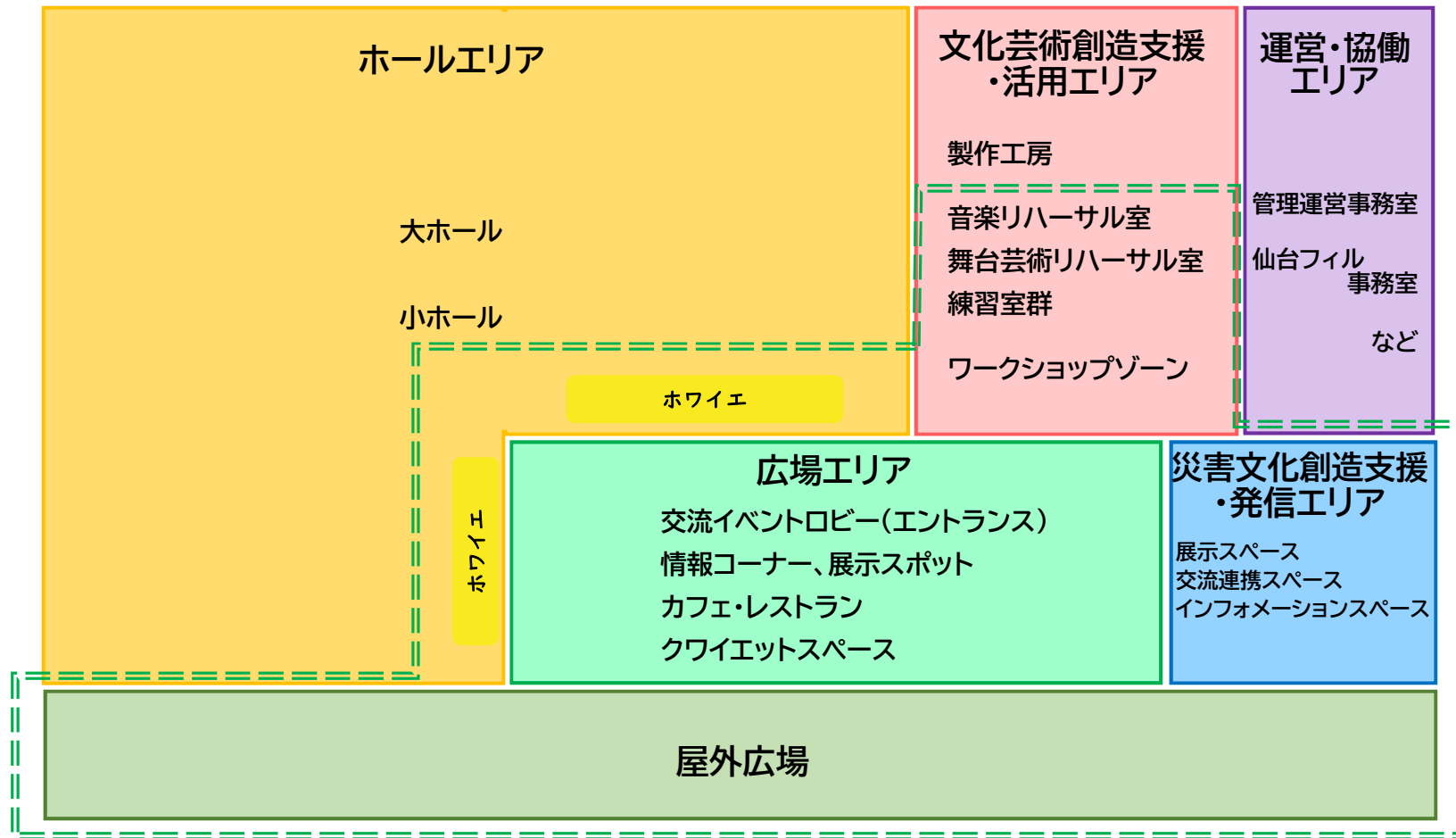
④諸室の相互利用について

音楽ホールの「ワークショップゾーン」、中心部震災メモリアル拠点の「交流連携スペース」内の諸室を開催される催しの規模に応じて相互に利用したり、震災にまつわる体験や記憶の録音・記録や災害文化に関する作業・工作などを音楽ホールの「製作工房等（小道具・美術等製作場、収録室等）」で行うなど、各諸室の相互利用を行っていくことを想定します。

【施設共用化による床面積削減について】

上記に記載のとおり施設共用化を図ることにより、それぞれの施設を単独整備した場合と比べ、1,000㎡程度の床面積削減が図られます。

(4)エリア構成イメージ



※この図はエリアごとのおおまかな面積比を反映のうえ平面化していますが、実際の施設は多階層となる想定です。
※緑色の破線で囲まれた部分は、貸出がないときは開放されたり、行われている活動が外へ染み出していったりといった、絶えず多様な交流や新たな出会いが生まれるような空間を目指します。

2. 施設の詳細

(1)施設の規模(面積構成)

エリア	主な施設	床面積の 想定
①ホール エリア	<p>○大ホール：クラシックのコンサートやオペラ・バレエの上演などをはじめとする生の音源に対する音響を重視した、2,000席規模のホール（ホワイエ・楽屋・バックヤード等含め7,400～7,500㎡程度）</p> <p>○小ホール：生の音源に対する音響を重視しつつ、市民の多様な実演芸術活動の場となり、プロフェッショナルな創造活動の場ともなる300～500席程度のホール（ホワイエ・楽屋・バックヤード等含め1,600～1,700㎡程度）</p> <p>※ホールの利用が無いときには開放することを想定している大ホールホワイエは1,600～1,700㎡程度、小ホールホワイエは250～300㎡程度。</p>	9,000㎡～ 9,200㎡ 程度
②文化芸術 創造支援・ 活用エリア	<p>○音楽リハーサル室（倉庫・諸室等含め500㎡程度）</p> <p>○舞台芸術リハーサル室（倉庫・諸室等含め600㎡程度）</p> <p>○練習室群（複数の中・小練習室等）</p> <p>○製作工房等（小道具・美術等製作場、収録室等）</p> <p>○ワークショップゾーン（1,100㎡程度） ・ワークショップスタジオ（300㎡程度） ・子どものための空間、創作アトリエ等</p>	3,000㎡～ 3,100㎡ 程度
③災害文化 創造支援・ 発信エリア	<p>○展示スペース（常設展示、企画展示、展示開発室）</p> <p>○交流連携スペース（アーカイブ活用スペース、相談カウンター、ラボ、ワークショップスペース）</p> <p>○インフォメーションスペース</p>	1,250㎡ 程度
④広場エリア	<p>○交流ロビーゾーン ・交流イベントロビー（エントランス）（1,200㎡程度） ・情報コーナー、展示スポット、カフェ・レストラン等</p> <p>○クワイエットスペース</p> <p>○屋外広場 ※床面積算定外</p>	2,000㎡～ 2,100㎡ 程度
⑤運営・協働 エリア	<p>○施設を管理運営・維持管理していくために必要となる諸室、事業運営等を協働して推進していく団体等の諸室等</p>	2,300㎡～ 2,600㎡ 程度
その他	<p>○廊下、階段、エレベーター、エスカレーター、ダクトスペースなどの機能施設以外の共通動線等および設備・機械室等</p>	13,450㎡～ 13,750㎡ 程度
<p>想定延床面積(上記床面積の合計) ※施設内駐車場面積は算定せず</p>		31,000㎡～32,000㎡程度
<p>想定建築面積</p>		9,000㎡～11,500㎡程度

(2)主要施設の方向性

①-1 ホールエリア 大ホール

大ホール	クラシックのコンサートやオペラ・バレエの上演などをはじめとする生の音源に対する音響を重視した2,000席規模のホール
概要	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「ホールが楽器」と言われるような、生の音源の響きに対する優れた音響性能を有するとともに、演奏者と聴衆が一体感を感じられるよう、舞台と客席が融和した音楽空間として魅力的なホールとする。 ○ 舞台の音響反射に係る設備は可変とし、視認性に優れ、オペラ・バレエなどの多彩な舞台芸術公演が可能な「プロセニウム形式」に転換できるホールとする。 ○ 客席は2,000席規模（固定席）とする。 ○ 生の音源の響きに対する音響性能の実現という視点を最重視し、この視点において望ましいホールの空間容積を確保するとともに、舞台形状、舞台設備、客席構造等の検討にも最先端の技術、最高度の知見を結集し、これからの時代を牽引し、国内外から高い評価を獲得できるホールを目指す。 ○ 十分な広さと優れた設備・機能を有する舞台を、プロ・市民がともに使えるよう、入場料や使用する客席規模に応じた段階的な使用料設定を想定する。
舞台関係	<ul style="list-style-type: none"> ○ 音響反射設備を設置した形式をホールの常態とするが、できる限り短時間、軽作業でプロセニウム形式への転換が行われるよう、設備上の配慮を行う。 ○ 客席の前部は昇降できるものとし、音響反射設備設置形式においてはこの部分を舞台の高さまで上げてステージの一部とする。プロセニウム形式においては、オーケストラピットとして活用できるようにする。 ○ 音響反射設備設置形式においては、大型の合唱付の大編成オーケストラの公演にも対応できる広さを確保する。 ○ プロセニウム形式においては、基本として間口10間*、奥行10間程度の演技空間を確保する。プロセニウム・アーチ（舞台を額縁のように切り取る構造物）を可変のものとするなどにより、8間間口程度の演技空間としても適切に利用できるものとする。舞台の上手、下手に、演技空間と同等の広さの空間（側舞台）を確保する。 ※1間=約1.82メートル ○ 搬出入口、ピアノ庫などは、可能な限り舞台と同一平面に配置する。不可能な場合は専用エレベーター等を付置し、適切な運用ができるようにする。 ○ 搬出入口については、11トントラック2台が同時に積み下ろしでき、荷解き場、舞台等との連続性が確保されたものとする。
楽屋関係	<ul style="list-style-type: none"> ○ 様々な広さ・設備を備えた楽屋を、できる限り舞台と同じ平面に設ける。 ○ できる限り音出し調音ができるよう防音性に配慮し、一部の楽屋は大きな音の出る楽器でも対応できるように高い防音レベルとする。
客席関係	<ul style="list-style-type: none"> ○ 客席の配置については、音楽や舞台芸術に求められる性能要件を踏まえつつ、多階層化、バルコニー席の設置など最善の工夫を図る。 ○ 車椅子席など障害のある方のための座席は、席数を適切に確保するだけでなく、利用者が席を選択できるような工夫を図る。 ○ ホワイエはホールの利用が無いときには開放され、一般来館者が利用できるようにする。

①-2 ホールエリア 小ホール

小ホール	生の音源に対する音響を重視しつつ、市民の多様な実演芸術活動の場となり、プロフェッショナルな創造活動の場ともなる300～500席程度のホール
概要	<ul style="list-style-type: none"> ○ リサイタルや小編成の音楽演奏会を想定し、生の音源に対する音響性能を重視するとともに、上手、下手に側舞台を持つ舞台に可変できるものとし、演劇、ダンス、バレエ、演芸などの舞台芸術でも利用できるものとする。 ○ 客席規模は300～500席程度（固定席）とし、客席と舞台が向かい合うエンドステージ形式を想定する。 ○ 市民の多様な創造活動の場になるとともに、実験的な取組みなどでプロにも使われるような空間となることを目指す。
舞台関係	<ul style="list-style-type: none"> ○ 6間※間口の演技エリアが確保できる舞台の広さとする。舞台上部にバトンを設けるが、フライタワー、プロセニウムは持たない。 ※1間＝約1.82メートル ○ 舞台を、音響反射板の役割を担う側壁で囲むとともに、この側壁を開放するなどして、上手、下手にそれぞれ3間幅程度の大きさで側舞台を備える。 ○ 搬出入口、ピアノ庫などは可能な限り舞台と同一平面に配置するが、不可能な場合には専用エレベーター等を付置し、適切な運用ができるようにする。
楽屋関係	<ul style="list-style-type: none"> ○ 様々な広さ・設備を備えた楽屋を、できる限り舞台と同じ平面に設ける。 ○ できる限り音出し調音ができるよう防音性に配慮し、一部の楽屋は大きな音の出る楽器でも対応できるような高い防音レベルとする。
客席関係	<ul style="list-style-type: none"> ○ 客席前部の椅子を外して、1間程度の前舞台が組める仕組みを検討する。 ○ ホワイエを適切な規模で設ける。

②-1 文化芸術創造支援・活用エリア 音楽リハーサル室

音楽リハーサル室	オーケストラ・合唱など生の音源の演奏に対応したリハーサル室
概要	<ul style="list-style-type: none"> ○ 大ホールの音響反射設備設置時の舞台面積を基本に、4管編成のオーケストラの演奏が十分に可能な広さを確保する。天井の高さも適切に確保し、大ホールでの音響条件にできるだけ近づけることで、大ホール公演のリハーサルに適した空間とする。 ○ オーケストラや合唱等の、本番に向けた大規模練習の場と想定する。 ○ 客席を設営することで、小規模な発表会など、観客を入れた利用にも対応できるようにする。
各種事項	<ul style="list-style-type: none"> ○ 天井にはバトンを設ける。 ○ 公開リハーサル等に対応できるよう、区画された小規模な観覧席を設ける。 ○ フルコンサートピアノや発表会等で必要となる機材・備品、それらを保管する備品庫、控室等を整備する。 ○ 仙台フィルハーモニー管弦楽団や大ホールで公演を予定している団体などが必要なタイミングで利用できるよう、優先予約の仕組みを検討する。

②-2 文化芸術創造支援・活用エリア 舞台芸術リハーサル室

舞台芸術リハーサル室	バレエ・演劇等、舞台芸術のためのリハーサル室
概要	<ul style="list-style-type: none"> ○ 大ホールの演技空間（10間四方）より一回り大きい面積を確保し、オペラ、バレエ、演劇、舞踊などの主ホールでの公演のリハーサル、通し稽古などに適した空間とする。 ○ 大ホールでの舞台演出等を再現、確認できるよう、必要な舞台設備を持つとともに、バレエ・ダンス等での利用も踏まえ天井高を十分に確保する。 ○ 客席を設営することで、小規模な発表会など、観客を入れた利用にも対応できるようにする。
各種事項	<ul style="list-style-type: none"> ○ 一辺の壁には一面に鏡を配する。適切な位置にバレエバーを配置する。これらはカーテン等で覆うことができるものとする。天井にはバトンを設ける。 ○ 発表会時に視認性の良い客席を容易に組めるよう、一辺の壁に小型のロールバックチェア（折り畳んで収納可能な座席）を備えることを検討する。 ○ 多様な活動に対応するための床面養生用シートもしくはパネル、ピアノ、発表会等で必要となる機材・備品、それらを保管する備品庫、控室等を整備する。 ○ 大ホールで公演を予定している団体などが必要なタイミングで利用できるよう、優先予約の仕組みを検討する。

②-3 文化芸術創造支援・活用エリア 練習室群

練習室群	多様な実演芸術の活動の稽古・練習のための部屋
概要	<ul style="list-style-type: none"> ○ 様々なジャンルの実演芸術の稽古・練習のため、中規模、小規模の異なる性能の部屋を複数整備する。中規模練習室の1つは、小ホールのリハーサルに適切なものとする。 ○ ホール等での公演や発表を目指した稽古・練習利用をはじめ、市民の日常的な文化活動での利用を想定する。施設の自主制作事業における利用も想定する。
各種事項	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各室に、ピアノ等の必要な備品を配置する。防音性能を確保する。 ○ 壁面をガラスで仕上げ、音は漏れないが、周囲から活動を見ることができる部屋を複数設ける。 ○ 大型事業の開催時には控室、会議室等として利用されることも想定する。

②-4 文化芸術創造支援・活用エリア 製作工房等

製作工房等	舞台芸術公演等に伴う様々な製作活動を行う場
概要	<ul style="list-style-type: none"> ○ 大ホールや小ホールでの公演、ワークショップなどの体験事業などで使われる道具、衣裳、舞台美術などを製作する場を整備する。木工等の加工場、水場のある舞台美術等製作室、小道具や衣裳などを製作・補修する作業場、洗濯場、収録室などを設ける。
各種事項	<ul style="list-style-type: none"> ○ 専門の技術者・スタッフだけでなく、体験・育成事業や子ども向けワークショップなどで幅広い層が利用することを想定する。

②-5 文化芸術創造支援・活用エリア ワークショップゾーン

ワークショップゾーン	0歳から高齢者まで、全ての人が多様な糸口から文化芸術を体験し、参加できる場、同時に、そのための人材を育む場
概要	<ul style="list-style-type: none"> ○ 0歳から高齢者まで、障害の有無に関わらず、国籍や社会的背景を問わず、全ての人が多様な糸口から、文化芸術の体験・創作に参加できる場を提供する。 ○ そのために、独自にワークショップ等のプログラムを開発できる人材を育む場、プログラムを適切に制作・実践していくための場として、ワークショップスタジオ、創作アトリエ、子どものための空間などを設ける。 ○ ワークショップスタジオは、照明・音響等の舞台技術を用いた演出が可能であるとともに、参加者も音出ししたり、大きく身体を動かしたりできるよう、外部に音が漏れない防音の空間を想定する。 ○ 創作アトリエは音楽の鑑賞をベースに軽易な動きを伴う活動や、舞台美術など製作系のワークショップなどができる、一定の防音がなされた空間を想定する。 ○ 子どものための空間では、乳幼児を含む子どもたちが、それぞれの発達状況に応じたプログラムにより、様々な体験ができるようにする。事業の無いときには開放して、小さな子どもが自由に遊べるような空間とする。イベント開催時の託児スペースとしての活用も想定する。 ○ 障害のある人や様々な特性を持った人がストレスなく活動に参加できるよう、空間づくりにおいて工夫する。 ○ 交流ロビーとは連続的につながり、交流ロビーを訪れた人が活動を見ることができたり、時に、交流ロビーに活動が展開していったりする、緩やかなつながりを持たせる。

③-1 災害文化創造支援・発信エリア 展示スペース

展示スペース	災害を知り、災害文化に触れる場
概要	<ul style="list-style-type: none"> ○ 3.11をはじめ過去の災害に関する知識を知るための常設展示の他、様々な企画展示を行うスペースを設ける。 ○ 市民や企業、教育・研究機関などが対話を通じ制作を行うことができる展示開発室を設ける。
検討事項	<ul style="list-style-type: none"> ○ 複合施設を訪れる来館者の目に留まるよう、往来がある動線上への配置や展示スペースに誘導しやすい設えを検討する。 ○ パネルや映像のみではなく、3.11の記憶を呼び起こし、対話を生むきっかけになる「モノ」を展示する工夫について検討する。

③-2 災害文化創造支援・発信エリア 交流連携スペース

交流連携スペース	多様な主体が利用・交流し、災害文化を創造する場
概要	<ul style="list-style-type: none"> ○ 過去の災害に関する写真や映像等を共有するアーカイブを活用し、未来の災害への備えに寄与するワークショップ等を開催する場。 ○ 個人や地域等が抱える様々な課題を捉え、災害文化の創造に導く支援の拠点となる相談カウンタースペースを整備する。 ○ 学校教育利用を想定し、少人数から50人程度までを収容できる広さと必要な設備を備えたワークショップスペースを整備する。 ○ 市民の勉強会や研究活動の場であり、その活動を専門人材が支援するラボ（市民研究室）を整備する。
検討事項	<ul style="list-style-type: none"> ○ 複数人が利用できるデータアーカイブ専用端末や大型壁面モニターを備え、講習会やワークショップが開催できる設えとする。 ○ ワorkshopスペースは、黒板式の机、落書きできる壁など楽しみながら交流を生む仕掛けを検討するとともに、活動の様子が他エリアから感じられるセミオープンスペースであることが望ましい。 ○ 相談カウンタースペースは、そこを訪れる相談者の活動支援のほか、アーカイブ活用や展示事業に関する支援が行えるよう、複数事業が展開されるスペースをカバーできる位置への整備が望ましい。

③-3 災害文化創造支援・発信エリア インフォメーションスペース

インフォメーションスペース	3.11被災各地や国内外をつなぐ窓口
概要	<ul style="list-style-type: none"> ○ 3.11被災各地の伝承施設情報等を発信するため、大型ビジョンや検索機能を備えたスペースを整備する。
検討事項	<ul style="list-style-type: none"> ○ 災害関連情報のみではなく、世界各地の災害文化にまつわる情報を紹介するなど本拠点ならではの機能を検討する。

※ 災害文化創造支援・発信エリアのパーツとなる各スペースは相互に連携している。交流連携スペースを中心に、展示スペースの一部とインフォメーションスペースが複合施設内に伸展していくような配置が望ましい。

④-1 広場エリア 交流ロビーゾーン

交流ロビーゾーン	誰もがいつでも訪れ、憩い、文化芸術と災害文化との出会いがある場
概要	<ul style="list-style-type: none"> ○ エントランスは「交流イベントロビー」として、人々が目的を持たずに訪れても居場所があり、文化芸術や災害文化との出会いがあり、周りで展開される文化創造活動に触発されたり、人とのコミュニケーションや出会いが生まれたりする、地域の交流拠点としての役割を果たす。 ○ 演奏、パフォーマンス、展示、イベントなど、施設に賑わいを生み、文化芸術や災害文化への関心を高め、エリア全体の魅力向上につながるような取組みを、施設が主体となって行っていくことを想定し、そのために必要な設備を備える。 ○ 総合案内や情報センター、カフェ・レストラン、ミニショップなどを備える。また、自由に使える椅子・テーブル等を置き、気軽に集い、憩える空間とする。 ○ 大型映像ビジョンを設け、館内の活動を放映したり、映像作品の放映をしたり、ライブビューイングを行うなど多様な活用を想定する。 ○ 施設で行われる事業の魅力を伝えたり、仙台のこれまでの歩みや魅力を紹介する展示スポットを設ける。 ○ 文化芸術と災害文化に関するワークショップゾーン、音楽・舞台芸術リハーサル室、練習室、屋外広場といった他の施設との連続性を意識し、それらの空間で行われている活動が見えたり、交流ロビーゾーンにまで活動が拡張されたりといったことを想定する。

④-2 広場エリア クワイエットスペース

クワイエットスペース	3.11被災者を偲び、想いをいたす場
概要	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本複合施設の契機となった東日本大震災を心に刻むシンボルとして、犠牲者を悼み、想いをいたす場を設ける。
検討事項	<ul style="list-style-type: none"> ○ 東日本大震災は、複合施設整備の契機でもあることから、本施設のシンボルとして、印象を残す設えや配置が望ましい。 ○ 誰でも利用できる場所でありながら、静かな時間を過ごすことができるよう、適切なあり方・空間配置を検討する。

④-3 広場エリア 屋外広場

屋外広場	誰もが自由に集い、憩えるとともに、様々な魅力的な催事が行われ、エリアへの来訪意欲を増幅させるような屋外広場
概要	<ul style="list-style-type: none"> ○ 広場として、誰もが自由に集うことができ、憩える環境を整備する。 ○ 演奏や各種パフォーマンス、体験型防災減災イベント、マルシェ、大道芸、屋外展示など、様々な催事の開催が可能な空間とする。 ○ 施設内のカフェとの連携やキッチンカーの導入などによって、飲食が自由にできるような広場とする。 ○ 交流ロビーゾーン（エントランス）との連続性を持ち、交流拠点としての役割を果たす。 ○ 3.11など大規模災害発生日に市民が集い、祈念行事などを行える場とする。

⑤運営・協働エリア

運営・協働エリア	施設の管理運営・事業実施に必要となる諸室、 事業を協働して推進していく団体の諸室等
概要	<ul style="list-style-type: none"> ○ 施設の管理運営や事業実施に必要となる事務室、会議室、倉庫、受付相談窓口等を整備する。 ○ 国際音楽コンクールなど市の文化振興施策を展開する事務局、本施設を本拠地とする仙台フィルハーモニー管弦楽団の事務局や楽器庫・楽譜庫等、事業を協働して推進していく団体の諸室を整備する。

(3)ホール施設としての音響設計について

大ホールをはじめとする演奏空間においては、生の音源に対する優れた音響性能を有することが重要となります。その鍵を握るのが音響設計であり、本施設では音響設計者の選定や業務推進体制、ホールの音響実験模型の作成の必要性などを含め、効果的なあり方を検討します。

(4)施設のシンボル性について

- 本施設は、仙台に新たな魅力・価値・活気をもたらす、シビックプライドを醸成することを目指しています。そのため、市民から、そして対外的にも、杜の都の新たなシンボルとして真に認められるようになることが重要となります。
- 同時に、市民一人ひとりが次なる災害に備えるために、3.11の記憶や復興の歩みを後世に繋いでいくシンボルでありつづけることも本施設の重要な役割です。
- 多くの人々の参画のもと展開される、施設の多様な活動そのものが、シンボル性を獲得するための大切な要素であると言えますが、例えば、施設名称（愛称）、建築デザイン、モニュメントの設置、壁画、決まった日時に鳴らす鐘などといった要素も、シンボル性をより高めることにつながると考えられます。
- 将来にわたり多くの人々に本複合整備の意義が伝わり、愛される施設となるよう、シンボル性のあり方について、基本計画策定の中でも引き続き検討していくこととします。